廬雲

十一月號

荻原井泉水主宰

第三十五卷　第五號

昭和二十二年十一月一日(毎月一回一日)發行　十一
昭和二十二年八月十四日　第三種郵便物認可

目次

海つり……井泉水一
ひでりばたけの遠山……井泉水二
旅は暑く　家は涼し……井泉水三
麗日壇……四
秋日隨談……井泉水四
青春……健三九
一枚月旦……莖吉二〇
秋の雨……井泉水三
俳句的エスプリ……逸朗二四
明月壇……二六
句會通信……三
雲・海・濱……橋本健三
表紙……井泉水

熱海　山木旅館にて　井泉水

立歩きする子を連れて宿は二月のがらす戸

海のいろは梅がいまさかりださうな

層雲同人の方には親戚へでも泊る氣輕さでお越し願ひたう存じます。東海道上下の際、山木の豐かな湯にて、ぜひ旅の汗をお流し下さい。

熱海市旭町

山木旅館

鈴木あい子

電話〔二一二一番〕〔三〇三一番〕

有隣亭蔵書

層雲

昭和22年11月

第35巻第5號（通巻410號）

海つり

井泉水

旅はおもしろい。きのふの朝は信州の山の中にゐたが、けさは尾張の海の上にゐる。秋はたのしい。山にゐる時は、山の幸のブドウがあり、マツタケがある。海に來れば海の幸のハゼがあり、キスがある。前夜、内海の旅館で、今日は料飲禁止といふことだが、自分で釣つてきたものはよろしい、といふので、健三其他の同人が、私をもてなす爲に――ありがたいことだ――海からタイだの、エビだのゝ魚をいろ〳〵と釣つてきて、それを旅館で料理してたべさせてくれた。皆、新しくて、大そううまかつた。

それで、此の海でそんなに、やす〳〵と釣れるものならば、釣をこゝろみようではないか、と私が云ひ出して、それなら、潮加減は朝早い方が好いといふので、けさは六時ごろ起きぬけに舟を出すことゝした。顔は海へ出てから洗へばいゝ、とも云はれたが、それでも顔だけは宿で洗つて、手帳一冊だけを持つて飛び出した。もちろん、釣の道具は舟に用意してあるし、しようゆや皿小鉢なども、すでに舟に入れてある。健三、其他三四人が乘り込んで、こぎ出した。

釣り場は、つぶての浦といふ磯から近いところが初め選ばれた。糸まきの先のハリに餌をつけて、舟べりに垂らすと、オモリの重みで、糸まきが廻轉しながら、糸は海の底まで沈んでゆく。その手頃のところでアタリを待つのだ。けさは實によく風いでゐた。そして空は秋らしくクツキリと晴れて、魚のうろこのやうな美しい雲、すなわちイワシグモが出てゐた。この雲のある日はイワシがとれるといふのだが、私たちはイワシを釣るのではない、キスをつろうといふつもりである。

とはいへ、糸を垂れてゐる五人の――船頭もまぜて――誰の糸もさつぱりダメなのである。どうも、前日の談の模様とはちがうやうなのがちとフシギでもある。だが、よし。私には、魚は釣れなくとも、句が少しは釣れそうな氣がしてきたのである。もつとも、はじめにかゝつたのは、ザコのやうな句ではあつたが……。

秋は底まで晴れ、えは取られてばかり

皿とほうちようと秋空、これから釣る

ひでりばたけの遠山

荻原井泉水

○輕井澤千が瀧（八月三日）

遠山　無限碧層層と　ひぐらし
夕やけ　火のやうな　雲の　くれぎると　いなびかりする

○信濃追分、龍興居（八月四日）

このごろ　ふしぎに　しづかな　火の山である　すそ野の　萩
麥　これだけ　掛け干して　君と　おくさんとの　淺間ふもと
君の作つた豆　君どたべて　戰爭以來の　久濶
はたけ以外は　雜草　たくましく　水は　山からくる
はなしは、はたけでは　きりぎりす　ないてゐる
君が塗つた壁の　こうろぎの　鳴くころは　さぞ
ゆつくり　ひるねでもと　いはれるものの　きりぎりす

○岩村田、如風亭（八月九日）

ハリ　うつてもらうて　日ざかりの　肩いれまする
雲坪ここに來て　かいた　これの山水　よろし　赤い桃を　むく
鐵山を見る　次には　龍の圖をかけ　うちわを　とり

○三井村　江畔亭（八月九日）

君たち　おや子の　はたけの道　通り　暑い日　風はある
やつと　大根の種は　まきましたといふ　きのうの　けふの　會
これが　君の句の　しその花　つめたい井戸も　ある
燒けばだけの　火のやうな　トマトの　みづ〳〵しさよ
片影を待つて　おいとまして　このへん　旱ばたけの　遠山
日ぐれ　ゆかたのまま　送つてきて　いつまでも　立つてゐなさる

添へ書

これは、此の夏の作品で、もう寒くなつた今ごろ、發表するのも、どうかと思つたが、來年まで棚上げしておくのも亦どうかと考へて、ここに一掃きしておく。淺間山はいつも煙を吐いてゐる山だが、今年の夏はふしぎに靜まりかへつてゐた、それが大爆發の前兆でもあつて、八月十四日の正午すぎに、大噴火をおこして、登山者十數名が死傷したのである。私は、その數日前に峯の茶屋まで登つたのである。

追分の龍興居は、大工左官の手が足りなくて、君が壁まで塗つたといふ談。君が信州へ疎開する前に會つた時、自分等彫そをやつてゐる者は、職爭中は職業がえをする外はないが、彫そに近い職業と云へば壁屋サンぐらひなものだと笑つて話されたことがあるのも思ひ出される。

岩村田の如風君は雲坪や鐵山の作を所藏してゐる。雲坪も、鐵山も岩村田へ客遊してゐたことがあるので、此のへんには掘出し物もタマにはあるわけだ。「龍」の一幅は大そうかわたつ圖柄でおもしろかつた。

三井村の江畔老と父草君とが親子で層雲

旅は暑く家はすずし

荻原井泉水

○小諸、深草亭（八月十日）

懐古園とある　古い門のうち　夏柳　道が　おくへある
水に　すいれん　旅で　朝はやく　散歩する
草木ふかし　城あと　はたけにして　ひでり
夏は　爐の中　ふかく　朝かげ　主と　ひざを　くづす

○上田、妖佛居（八月十日）

疎開のあとや　片側町や　日のさかり　尋ねてゆく
西日　ふかくさせて　せんぷうきの　まわつてゐる　はね
暑いまちで　暑い日が　くれました　柳の木

○松本、百竹居（八月十二日）

かごまくら　風がある　旅で　けふひるねする
うたうて　盆ちようちん　さげて　橋をくる　みんなおさなき
店は　ぼん花　トマト　きうりなど　露けくて　旅もおわり

○旅をもどりて（八月十三日）

むかへ火　旅をもどりし　夕めし　たべて　さて
ことし　おがらの　高いこと云ふ　火にしつつ　聞く
はだかで　じゆずは　手にして　むかへ火のいろ　よろし
けふは　うちのひぐらし　とうぶん　うちに　ゐる
ひぐらし　玄關で　といふ　名刺では　ある
はだか　山の　松の木の　はだえも　夕日に　なる
かなかなや　まだまだ　明るくて　一日の　おわり
あかるくてふる　ひぐらし　こまごまと　ふる

人であることは、改めて話すまでもあるまい。江畔の句によくある、所謂「一つ家」にその日みんな集つた。「しその花」の句といふのは、父草の作——

しその花ちるはははのこゑするいべうら

を云ふのである。

小諸の懐古園は昔の城跡で、今は公園となつてゐる。此の中に宮坂古梁氏が庵をもつて、故島崎藤村が深草亭と名づけたといふことは前々號の卷頭の文に書いた。その亭記にもある通り「草木ふかし」といふ句は「國破れて山河あり」といふ古詩に因んで味つてもらひたい。

松本は草市の立つ晩だつた。女の子が長いたもとの晴着をきて、ちようちんをさげて二三十人ばかりお盆の唄をうたひながら町を通るのは涼しい風俗である。

信州では、迎へ火にはシラカンバの皮をたく。東京では、オガラ（麻の殼）をたく私の幼いころは、草市で、オガラを長いまま手ににぎりきれない程、買つてきたものだつたが、此のごろは草市も立たず、青物店で、蓮の葉ホウヅキなどと共に、賣るのだ。それが三本一圓だといふことだ。迎へ火をたく家も近來少くなつたやうである。

麗日壇

井泉水選

観音さまの裏側で寶つてゐるうみほほづきのあかさ秋の日　平松星童

みのりのなかを黒い汽關車が通つてからのいなごがだりはねたりする

二百十日ごろの風が通るときこどもすすきの原を豆腐買ひです　内藤善知

ことしのこうろぎがもう大きな兵隊靴のそば、ないてゐる

あらしがまだのこつてゐるし　よんはいたつ

かりがわたつてゆく灯もつけず秋くらいかがみにをる　瀧山重三

でんしん棒なめに雁のよぎるとき新聞記者はつかれて歸る

風だけがはなやいでゐる黒い寫眞機のようなわらやのかたち秋である

そらが青い地圖になつたままのよるがくる

蟹のなかで虫がないてゐるような、落日

てふてふ、しやぼん玉のようなお天氣である

春の、海よ　をちりばめたり

星が消される朝の構成

少女ガス燈のじで青い寶石のようにまつてゐる

つきよの花はコップの水に生かす

手にして匂わない花でどうやら熱もさがつたようで

林は芽ぶく頃の夕月馬車をあゆます

むすめ背たけも母ほどな花持つてゆくはお墓へゆく

そとよりも明るい月の菊にしてねる

雲、胸では氷ぐんぐんとけてゆく

看護婦ひとり池が凍らぬようになつた朝を掃きます

秋日隨談

井泉水

關東地方の誌友諸君に暴風雨被害の御見舞を申したい。舊知の人でアドレスのわかつてゐる方には見舞のハガキをさし上げておいたが、その殆ど凡ては「自分の方はありがたいことに、格別の被害はなかつた」といふ意味の返事だつたので、安心した。新聞やラヂオでは、ピックニュースとして、慘害の極めてひどかつた方面をクローズアップして報道したと見える。それで遠方の人々をおどろかした點もあろうかとおもふ。とにかく、慘害は局所的であつた事と、一體、水の害はジリジリと來るものだから避難に便しやすいといふのが事實かとおもふ。

とは云へ、笛吹川の鐵橋の流失した現狀の寫眞を見た時は、バクゲキでもかうまでは破壞されないだろうと思はれた。「怒つた水」といふものは、何としてもおそろしいものである。人間でも、めつたに腹を立てないやうな男が一旦怒るとなると、狂暴をふるうようなものだ。で、かようにも水を狂はしたものは何かといふことが問題になる。

山林のらん伐はもちろん、その大きな原因にちがひない。戰爭中は、むちやくちやに切つた。惡いと氣がつかないのではないが、いわゆる背に腹はかえ

あちさいがそのとき傘をひろげてからさようならをする　　芦立陶抄子

枯れてぬれて山が冬のなかにおいてある　　北田千秋子

雲が明るくなり月がくらくなると水音　　里井正子

ちやぶ台の足をだすときのふと思ひ出すひとのあつたり　　鹽田正吾

こぼれて咲いて月が出てをる　　松村邦夫

日中暑うて松葉ぼたん賞めてなど通る人もある

烏がしわがれた聲でなくのは田んぼの水が足りない

けふも雲のない日であつた蜘蛛がその巣を作つてゐる

ときどきいなづまするそらをゐてお茶とつけもの

病人としてひとり家にゐる松葉牡丹のみえるところ

海になみだつ風が丘にすこし松うごかしてゐる憩ひ

秋の灯と海の音ときみずの小鉢などあるテーブル

しみじみと三味の音をそれからもながれの音ながれてゐる

木が枯れてゐる木の中の枯れない木も、水にうつる

木にかたまつて墓がある月夜かげがある

ひとりの石にさくいりんさく

まつりの笛が通り月夜いつまでも明るい晩

しらなみしぶきつばきのはな

てふてふよちるはちるは

それでもお客さんあるので湯宿の白いつつじ

てがみ、秋がからつぽに晴れてゐて幸福をいのるという

秋がやわらかならんぶのいろ雨がやんでゐる

らんぷしづかにたいふうを言うらちお

鳩がぬれてゐて十羽あまりたいふう

霧がぬらしてゐるかまの火あかい機關車のづうたい

られなかつたのだから、何とも致し方はなかつたのだ。しかも、今日とて、建築資材やコンボウ材料の爲に、山はまた〳〵切られつゝある。又、戰爭中から堤防の斜面に、畑を作つた、畑にはムグラが住みやすい、ムグラが堤防の土をくずれやすくしたのも原因の一つだといふ。これとても、一坪でも增産といふ建前から、是認されてゐたのだ、しかも今日でも之は改められてはゐない。根本から考へれば、我々が惡かつたのだが、惡いと知りつゝもさうせざるを得なかつたのだから、やはり不可抗力と云はざるを得ない。

利根川は昔は、東京灣にそゝいでゐたのだが、改修して、これを太平洋にみちびくことにしたのだ。ところが、之が決潰したとなると、水は昔どおりに東京灣に向つて流れたのである。かつて、阿武隈川の改修工事をした時、その曲線的なコースを改めて直線的にした。ところが、阿武隈川大水の時には、その直線の水路は破れてしまつて、川は昔通りにウネ〳〵と曲線に流れたといふことである。さればと云つて、凡て自然のまゝがいゝ、人工はいけない、と云つてしまふ譯にも行かない。それでは文化もなく、科學もない。要は、人間が自然の眞理をよく〳〵察知して、それを新しく生かすといふことがカンジンである。そこがむづかしい所である。

○

燈台へ道が一すぢ虫が鳴いてゐる　印南健二

あなたの幸福をねがふ手紙ポストに入れました遠山が秋　原田赫城子

秋雨うまやうまいれてある　菅崎道雄

おんなパラソルさしてとうる白涙が秋めく　篠崎青鳩

さらさらふるふる久米の皿山山のかれ木　大竹大三

瓦の草にあめのふるはる　武田桂

雲がちちいろにうつり少女ボートを、漕ぐ　上柿小平

壁の白さはまんげつ

キリストが給ふパンそのような雲が一つ

くろいこうもり若葉の雨にひろげてぬれてみたし（病中）

手術のあとの許されし水の一口、一口にのむ

大分よくなつて背のかゆいところに手がとどいてゐる梅雨

くちくなると月がいい晩

ひらめのような私の手相の秋、見てもらつてゐる

夜がしづかすぎるので鼻ののびてゐる鼻毛

母のさとの子と子供の本などみせられてこたつ

はぎの花さく乳びんさげて乳とりにゆく

手にしてうるし紅葉、杉の落葉背負ひてもどる

ソフトのつば晩秋の空へたばこふかしてゐる

そんなこんな話して月が出てゐて歸ります

捨てるものは捨てて風ふいてゐる草

うちでとれた小豆の小豆色して日なた

枝にざくろの晴れきつてにちようさんびか

大文字少し消え殘つてゐるとさびしい星空

月明りとなつて花はちる〈ーモニカ

九月二十八日の名古屋俳句會（平野の會）に、私は豫め參會するつもりもなかつたが、不意に出席した。これが、台風のなせるワザなのだから、おかしなことである。――風のふきまわしといふ諺は此の事かもしれない、呵々――實はかうである。信州の鹽尻町で、文化講演を開くといふことで、私が出席の約束をしたのは九月初めのことだつた。ところが十五日の台風來、大洪水、笛吹川の鐵橋ツイラク、中央線不通となつた。私は、中央線不通の爲めに行かれないと鹽尻へ電報した。ところが、準備萬端今さら變更は困るから、名古屋まわりで來てくれ、といふ折返して先方からの電報なのだ。それで、いかにも大まわりだけれども、名古屋を通つて行くことにした。それで、名古屋の會へ、不意に私があらわれたといふ譯なのである。

現今、汽車はどこもコンザツをきわめてゐるけれども、東海道線だけは、比較的すいてゐる。殊に急行はすいてゐる。私は大船から名古屋まで、ゆつくり本を讀みながら行くことが出來た。諺に云ふ「急がばまわれ」とはちがうが、「ムリをせずにまわれ」といふ諺も成立しようかと思ふ。「目的」に向つて直進するには、直線路をとらなくてはならないが、しばらく目的を第二として、その道程をたのしむといふ心になれば、曲線路といふものゝ味ひのよろしさが解るのである。――「流るゝ水のごとく」、私は以

風、ひらけば先生の句閉づる時音する　淨心寺　惇

月見草ひらくときの靜けさ女何も言わない　佐藤　龍

線路の堤にかぼちや這わせて花が咲くと踏切番　岡田涙干

よめのはなしにきて雪の帽子をぬぐ　植田市麓

あらしめく雨にたそがれる花のそばばたけ　佐藤蛋明

せけんを遠くすごし秋のおまつりたいこ　高橋政二

日がはんらんする雪を枝からおとす　日向野秀策

母を葬りてよりのあれこれと暑い日つづく白いうちわ

學校がオルガンひいてゐる二百十日まえという稻の穗

桃咲く家のたんすの上の人形見えて通る

雨の日は一日雨降る粉屋のこぼれ萩の芽

すげなく歸しなことも頼ざしの蔕をぬく

水が橋の下をくぐりのうぜんかづらの咲いてゐる所を流れてゆく

朝からあついあついと日暮れになる黍の穗

お玉じやくし二人の溝はふかくなつてる

粟の穗黄いろい日があふるる平盤測量

黍の葉さやさやと佛さまがきて家にとうめよう

夕日まばゆい海から三里山になるうまやの馬

賣藥さんのとなり鍛冶屋さんざくろわれてゐる

舟が海に浮いてゐる夕月

船の上でも月を見てゐるのが見ゆる月夜で

たたみにはらばつて家のそばから粟のほ

盆おくりした風がかひこ棚月夜にしてゐる

かみなりが割いた木のうろまで月夜

朝が涼しい話して井戸の深い汲んでいく

前に、屏風の袋頭に書いたが、しぜんに流れてゐる水のやうに、しぜんに曲線路をとつて、楽しみながら行く、道草をくうてゐるやうだけれども、それはしばらくは目的をわすれて、その途々をうるほしながら、結局はやはり目的のところに着かないではゐない。

かういふと、いかにも心境的な、好い氣持の話になろうが、じつさいは、いつもさうばかりも云つてゐられない。そういふ事を書いてゐる私自身が、そうばかり考へてゐられない現實にぶつかるのだから、苦笑せざるをえない。早い談が――名古屋で、遲くとも其の日のうちに中央線へ連絡するだろうと考へてゐた列車が、わづかに十分ちがいで發車してしまつたあとで、其日はもう鹽尻行列車はないのだつた。私はやむをえず、名古屋に一泊した。翌朝は、八時發といふのがある、それで行つても、鹽尻着が一時四十分で、其の日一時より開會といふ講演時間に四十分はおくれる。これは聽衆には相すまないことだ。しかも、其の列車が大そうな混雜であつて、名古屋では乘れたが、多治見の乘換の時、とうてい乘客を收容しきれない。私は、もし其に乘れなくては、聽衆をいつわつてしまふことになるので、氣が氣でないどころではない。ようやく、窓から飛び込んで、やつと乘り込んだ時にはホツとしたのである。流るゝ水のごとく、しぜんに、いう〳〵とや

二百二十日靜隱一番船朝日あびてゆく　佐藤專子

音が秋深む唐もろこしの葉にある風　近藤益雄

よい風へ位置して集つて來るのを待つ　水谷青史

雲は花のような夕べ子をだいてくる　親井蓼牛花

海峽の潮鳴るは茶ぶく木のなか　上野忠三

青のり日なたに干していつ還る人の事　小林不未鳴

ぐんぐんあげてくる潮で青青ばんぱん歸つてくる船で　佐藤鈴村

日のいろも梅干土用二三日はすぎてゐる　下山一水

蟬幼く習字の稽古してゐる　田中操

子どもがかえるころの母の秋ぞら

夜を滿ちてくる水が雨のあと

暮れのこる橋が暮れてくるあめ

あけがた夕立してしじみ賣りの來てゐる朝はん

日ぐかり、子雀のきてゐる飛びゆくまで

やせたというやせたと思う會うてそれだけのこと

まろい山まろく雪ふつた

種とりきうり一本、風ふいてゐる

もう陽がなくなつてゐて分教場の杉の木

音は月夜の雜草へ水すてる

宵待草に女がゐて月が月のいろにふる

月夜のかげがないてゐる

菜の花や月は東にといつた風景山羊つれて歸る

沼は山かげ雲のかげ茂りこくなる

雨がうまやの屋根の草花さく

月夜明るい小川が旅立つ明日の今晩

つてばかりはゐられない、かういふ矛盾もある。

○

汽車の混雜といふものは、鎌倉から東京へ行く横須賀線などで、いつも經驗してゐることだから、乘つてさへしまへば、あとは何とかなるもので――、これが人間だから無事なので、荷物ならばとうにこわれてゐるのだと思ふことだが――しぜんに好くしたものである。その鹽梅行の超々滿員列車でも、もちろん立つたまゝではあるが、ひるのニギリメシをほゝばる餘裕はあつたのである。ところで、同じ立ン坊の四五人先に立つてゐる一人が――「先生ぢやありませんか」と聲をかけられた。その人は名刺を出して、今年の春、松本の講演會の時、出てゐた人だといふことだ。そうして、自分の水筒を私にさし出して、それを呑んでくれといふのだつた。私がニギリメシのあとに、茶もないことを見たので、しんせつに申出てくれたのである。いつたい、私は旅行して、どこへ行つても、そこには層雲の同人があつて、宿の事や食事はもちろんかゆい所に手のとどくやうにしてくれることを平生ありがたいことに思つてゐる。秋田へ行つた時、義齒の具合が惡くなつたのを、月々虹君がすぐに直してくれたし、京都へ行つて、齒が痛かつた時は、すぐる君がさつそく直してくれたやうに――私は「隨所に友あり」といふことを、うれしいことに思つてゐるのだが、此の滿員

新月夏の海棠のかぐはしい山道をおりて來る　木村乙羊
雨の日は雨の日の仕事がある馬のこぼしたものは鶏がたべる　深見武朗
やくそくのじかんが過ぎてからせみのなく木のかげ　松田一男
トマトも終りころのトマトをとつて空のくれいろ　青木青華
潮あげてくる橋のかみにも橋のひざかりをお祭が通る　富永谷衣
花の中から花屋のおかみさん顔を出してぽたん雪　名雪理輝
焼けトタンの屋根が月の光となりて居るとうきびのたけ　青　まさよし
毎日雨で田の青くさぎの白くふりつづく　市尾衣谷
蛙の聲、つつじはしべになり果ててゐる
いまもめいさいのままのビルディングさめざめ降る
夜になつても暑い夜の稲妻が山の松の木
湖につづく湖がある木を伐る音が赤松林の中
月が月の色となり松の中松虫のなく
きうりきざむ音が母である母がきてゐる
鶯まだ鳴く山の奥の一軒そのへん
振袖のようにコスモス風がきてゐるコスモス
麥の芽暮れのこり遠くでんきがともる
日のおちたばかりの空が明るい麥の芽
のら姿の娘さん自轉車でくる夕がたは麥の芽
秋がゼリーのようなパイプで思出もある
風、石ころけつて占う弱い心ももつてゐる
雪でもちらつきそうな風が背になる赤になる信號
屋根をおけば家になる家のつづいて空が秋
映畫館は大きな外國人の顔夕べ水をうつ
牛乳屋年より麥わら帽でくる夏がきてゐる

の汽車の中にも水筒の水を供給してくれる友がゐろうとは、じつに思ひがけなく、うれしく思つたことである。

○

鹽尻の講演會は私のおくれて著いたのを、公會堂では一ぱいの聽衆が待つてゐてくれた。私は半日、汽車でモミクシヤになつたあげくだが、二時間ばかりの談をして、又、すぐつゞいて有志の人々と一時間あまりの座談會をした。とにかく大そう盛會だつた。鹽尻といふ所は、中央線の乘換場所として知られてゐるだけで、昔の中仙道時代の繁華は今はない。土地の名士としては、現に米國勞働大臣と、故吉江喬松（孤雁）氏を出してゐる位のものだろう。そんな土地だから、文化講演などいふことも、町としては、はじめてやつたといふので、未曾有のことだと主催者も喜んでくれた。その發企人は、同人の松雨君である。かれは層雲人としてはズイブンふるい方だが、めつたに句をつくらない、と云つて、決して一日も句を忘れてはゐない、しかも他に新しい句をすゝめようともしない、勿論、私と知り合であることをフイチョウしたりすることもない。町では、かれが俳句人だといふことさへも知らない。それが何かの談のついでに、學校の校長に私のことを語つたことから、にわかに講演の談がもちあがつてきたのださうである。かれは、機運がやつと熟して

今日から學校がはじまる旗がへんぽん好い空になる　丸山素仁

ポンプが水をあげてゐる音も月夜、雲が海へ通る　大月喜三郎

夕べ芝生に一羽の蝶のおちてゐる靜かなる夏　米倉久枝

妻が見てわたしが見てよきバス一尾買うた春　桑不二男

月夜となる山が根に灯す家がこのごろ　中島山櫻子

夕餉すんでも日があるうちの松の木山の松の木　北田山口彦

扉すこしあけてあると雲、はだかの胸をうつされる　桐井あしひこ

おーいと暮鳥も呼んだそんな雲が一本の柿枝　加藤六々子

霧しづくしつつ馬は草をはみつつ　品川幸一郎

秋霧ふかきこの朝のニコライの鐘ひびきくる　古川紅雲

子供手を袋のようにして螢が中でともつて來てゐる　物部卓朗

夏、ふるさとのようなさびしいかなかな　三宅安太

トマトあかしトマトあをしぬれてゐる　木村幸雄

ずつと日ざかりの、風のある木かげが華僑事務所

スイッチョも何もかも青い夜のほうきの木

ナイフのような月の光に更けて夜が死んでゐるような

ねるとき雪やんだ竹が月夜

夫婦でふたつのしごともつてゐる夜のつゆふりつめる

はぎの花くすの花山の雨ならやんでは降る

いねの穗出揃うたきちきちばつた

雲からもれる月が光もつ風が黍の葉

風が、この子小さき足のうらみせてねてゐる

雪ばれの月夜になる月が工場の門

雪もよいの雲ぎれして月のあるところ帆ばしら

さざんかのはな月の光がつめたくてこぼれてゐる

きたらしいから、これからソロ〳〵と町の青年たちにはたらきかけようといふのである。このいわゆる「機運の熟する」といふのには、およそ二十年たつてゐるのだから、ズイブン氣の長い談である。だが、かれの山林の杉や松などは、二十年ぼかりでは、いくらも伸びてゐはしない、と位にかれは考へてゐるのだろう。一體、山林の持主といふものは氣の長いものである。

汽車でもまれた上に講演といふ、疲れた一日の、その翌日は、松雨の家でまる一日、ユックリとくつろいだ。その日はしづかな雨が、かれのゴジマンの庭の大松の枝をしつとりとぬらして降つてゐた。私たちは、かれが愛藏してゐた銘茶をいれてすゝり、奥さんが作つてくれたオコシをあじわひ、講演會から、お土産にくれたブドウや、ナシをあぢわつた。そして、座敷の床の間には雲坪の大幅の秋景山水がかけてある。此の大幅は、じつは私が愛藏してゐたものだが、私の家の床には大きすぎるし、松雨がいつぞや私の家に來た時に、之を見てほしがつてゐたので、かれに與へたものなのである。此の雲坪が私の家にあつた時には、私はめつたに取り出したことはない。ところが、かれに與へた爲に、私はいつもかれの家に來ると、この雲坪をながめて好い氣持になる。これは「與へた」といふことに依つて、私が自分で持つてゐること以上に、自分でも其をた

とうがらしさむくなる日のさしてゐる　降矢百峯

山は粟の穂も黍の穂もけふからお祭り　平つねを

草屋の麥の芽の湖が見えてくる汽車で　有竹四郎

日に透いて朝は白魚の皿の一盛りとて買う　阪部蝶三

鐵塔と夏雲とを遠景ににれの葉のピラピラしてゐる　富岡草兒

雨の舟が離れてゐる岸から散る　鹿島默太

ここにも白い蝶々が家の前たがやしてある　内久根聖己

戀の話人生の話涼んでゐると流れる星　白戸石路

齡というもの、今夜ひとりの盃にラヂオは切つておく　白石默忍冬

宵の芽は夜明けた水　高橋貞之

トマトのてんとう虫をとる畑についてきた子と　中村苦味生

晝月、ねむの花がかんざしのような　照井燈光

月は三日月の伊豆の山であり海の音であり

背い蓋にあさふるあめ

炎天汽車が笛ならして街の裏を通る

旅の町の迎ひ火よ

たくましき農夫の手、へさかづきをさしさかづきをうけ

あなたたち草の花つんでは赤いパラソルですすき原ゆく

四月も供米これで終りの檢査の梅ちりこぼれ

湯をでて宿のゆかたにかえて能登のしまやまもあめ

ぬれてにほう土を朝ふんでいく

ほきびの四五本に風がでて美しい日が海へ沈むところ

にらのはなあめやんでゐる

二階までのびた花秋の蜂とんでゐる

切株秋の陽があたりふるさとおやしろ

のしむことが出來るのである。アクセル・ムンスの「サンミシエル物語」には次のことばがあるそうである。

「自己のためにしまつておくものは、いつか之を失ふ、他人に與へてこそ永久にのこる……」

○

鹽尻町は山の中だが、松雨の家は峠にちかい方で一そう山の中だ。だが、私は信州の南部へ來た時には、大抵、かれの家に一泊する。戰爭中、日本中はしからバクゲキされても、こんな山の中だけは大丈夫だといふので、かれは私に疎開をすゝめてくれた。その時、私は鎌倉に移つてゐた後だつたが、いよ／＼となつたらば宜しく頼む、と頼んだ。かれは、座敷はとにかく、壕所が一しよでは具合が惡かろうから、私のために、壕所だけ新築しようと云ひ、木は自分の山にいくらでもあるから心配はないとも云つてくれてゐたが、ついに、その建築にかゝるに及ばずして戰爭が終つたのである。その時、私の家から寢具と衣類だけを疎開荷物として送つておいた。それが今でも、かれの土藏の中にはいつてゐる。現在、平和になつたと云つても、世界情勢はなはだ險惡な雲行でもある。又、何年か後には戰爭がはじまらぬともかぎらないから、其の時の用意に、荷物はあづかつておきませうと云つてくれるので、これもズイブン氣の長い談である。

まつたく炎天のほうきぐさかよ　内田六郎

孫としていまはこの子ひとり山の桐咲く　大山澄太

ひとつで腹のふくれる芋のまる焼きぬぐとく　増田松雨

明日は歸ろうひげ剃るしらが少しあるひげ　小原甲陵

しろし、繭を山にしてひるめし　細谷のぶき

月が光りだした背負つてはくる　關口江畔

ヒマがいまも二三本實をもつてゐる信號所　金井三良

はたけは大方とりつくされて秋風の白いてふてふ　齋藤てつ人

水打つて藥が動いてゐるたばこぼん　佐々木味化

らくごはちごくごくらくの話すす風ひるねする　山田こころ

朝から蝶の來る明けはなして今日客を待つ　三浦香女

焼いてもろこし親のない子もゐる　横關碧樓

かまといでからが草原暑くなる草のたけ　一色如佛

雲ぬいだ月のあかるさは祭へゆくこども

月を　か　ほ　に　い　ね　匂　ふ

一つこれが出入口でありもう枯ほしやの日さし

貧しく住むに雀をおどろかせし

お盆としてはすずしいといふみんな古里

月のくまなしと思ふ土ばしをわたる

そばまできてわたくしに月があかるいという

殘月の芙蓉白一つ咲いた

何を買うにも百圓札なら西瓜の切口

裏門しのびかへしざくろうれてゐる

うまそうな枝豆になりそうなきりぎりす

木から落葉はじめる空から月が出はじめる

かれの家は、私の書いた物もいろ〳〵とあるが、額はないので、私は「松雨亭」といふ額をかいてあげようかと思ひ、「松」の字はどんな風に書き「雨」の字はどんな風に書こうかと、こゝへ來て庭の松をながめ、クマの皮の上にアグラをかいて坐る毎に、いつも其の字の構想をする、それがもう十年位前からのことである。かれは、自分から紙を書いてくれとも云ひ出さないし、私から云ひ出す筋でもないので、それは私の構想たるにとゞまつてゐる。それが今度――「では書こうか」といふ談になつたので、そのうちには書かうと考へてゐる。これもズイブン氣の長い談である。

○

鹽尻町の中學校長女學校長達と、松雨も一しよに桔梗が原に遊んだ。桔梗が原といふのは、昔は桔梗のやうな野草がさいてゐる野原だつたのだが、此の二三十年來、そこを開たくして、果樹を作つた試が成功して、現在では、信州の中の最大の果樹地帶となつてゐる。ブドウ、洋梨、リンゴを多數に産する、そのうちでも、こゝのブドウは著名である。私たちは數多くある果樹園の中のMといふ家に寄せてもらつた。ブドウは鉢に盛つて、出された。或はむらさきに、或は青く、或は白綠色に、其の名は、ダライトン、コンコード、デラウエアなどと、其の品種の數々ある通りは、其の味ひもとりぐゝである

家中とんぼがぬけます竹細工屋さんお茶にしてゐる　金平二火

秋が、朝くらいうちからはたきかけて降つてきた　南川鴻亮

焼跡そうして焼残つた家根の向うの海が秋荒れてゐる　北村九泉子

このへん別荘ばかり夾竹桃花ざかり日ざかり　新納香樹

月雲をいでて蓮の葉の匂ひのする道　片岡樹裏人

暗い納屋には牛が雨の日の山吹　鈴木芋村

海士の家の魚籠が淋しい松原は夏の雨　矢内樹一

この朝北の風晴れてゐるので東京へ行く　酒井空史

水に澄む月に鳴る鐘が遠くで鳴る　小松粒三

柿をもぐとして柿のうへゆく　古瀬雪里子

かいばを切つてゐる牛の顔でてゐるも秋のあさ日よくあたり　森田十雨

海から日が出る一番で發つ　小西佛舎

やみそうな降りになつて花ざくろまだふつてゐる

雪空の窯へのびてゐる枝のふくら雀である

蒲雪物語は湯町の床屋のラヂオきく（飯坂にて）

娘と馬と乘つけてゆく五月雨

父にも拾わせていてふのおちば

百姓の家が、雪の林の木をきつてゐる朝の道

雨が雑木林へ雪をもつてきた村の店さき

大雪となつて葉けいとうそこにもろこし

子供りんご色のほほ雪樺かろくひいてくる

日差しさびしく白いばかり蒋蓼のはなかな

風がどの枝にも蝶にはゆく道

ぬれてゐるほしものとへちまさいてゐる

水草のながさを流れてゐる

水、どれもこれも、果物すきの私にはうれしかつた。ブドウの酒もまたうまかつた、しかし、ブドウの酒に好い氣持になりすぎてはいけない。歸り途に一つ、女學校の爲に講演をたのまれてゐるのであつたが……。

此の家は、桔梗が原のうちでも代表的の家であつて、天皇陛下が御巡幸の際には、此の家のブドウを献上するといふことになつてゐるさうである。私は園主から筆と紙とを出されたので、とりあへず——

ぶどうは紫雲の如し御幸を待つ

と書いた。少々、おざなりの句で氣がひけたけれども……。

ところで、天皇陛下の信越御巡幸は最初、九月下旬といふ豫定であつたが、かの台風で、甲州の國道が不通になつたために、約一ヶ月の延期といふことになつたのである。陛下の御料にと選定しておいたブドウは、一ヶ月も先きまで木につけておくわけには行かない。そこで、それは又別に考へることにして、私たちの爲に此の日、鉢にもられたブドウが卽ち、その陛下御料の爲のブドウなのだそうである。これも亦、台風の爲すところのワザであつて、台風のあつた爲に、野人私たちの口に、此の紫の雲がはいつたといふ次第なのである。

○

はだかでくらす日にすずしすぎる日もみようがのたけ　藤野番紅花

通り雨の通つてしまつたふたり話して通る　財馬呵歩

くちびるのいろに氷水とけるほどの淡い話です　井上充夫

蕃木の根にまで暑い西日それもかげり　小澤武二

青い沼の空やもつと青い森の空やくれかかる　佐藤露江

ポンプ井戸から水が出てきて朝霧朝日になる　井上一二

言いたいことはつきりいうて山の三日月

屋根に南瓜這わせておぢいさんの新盆がくるおばあさん

照り つづく 風の 雑草

櫻もみぢの島で炭焼く

腰かけて茸山の向うにも日のさす山

かぼちやが去年のところにぶら下り今年のくらし

舗装したときの犬の足あとが雨ふりつづく

工場街の空は日がま上にある道の草

川波照つてきてけふ祭があるという橋

戦災まぬがれた街をいろ高みにきてまことに春

トマトつぶらに赤らんできて雨のない夕焼空

炎天煙はかない煙突四五本の街を見おろす

すべりひゆもたけて通勤の夏も終ろうとする

炎天の徑が森に吸われてゆく車窓を見る他ない

月々虹が釣つてゐそうな橋そのかみしもの橋も夏

御手の夏帽へわたしも帽をふる（行幸を迎えて）

奥の細道その夏草に民草として

雨のしげしげと風の八ッ手の葉

七夕の夜は泊りに來てゐて子供とえほん

松本には、かくべつの用事もないのだが、近くまで來ながら、立寄らないのも、ギリが悪いやうなので寄つた。こゝには、今、層雲人は居ないけれども、I、T、M、Y、Sなどいふ知人が多いのである。その中の若い二三人が云ふことに――今夜は月が好ささうだから城山へ月見に出かけませう、どうですか、少し道は悪いけれども……と。聞けば、行程二キロ位だといふから、私はよかろうと云つた。と、若い人々は行動が早い、さつそくに自轉車で、御馳走を狩りあつめに走つて行つたらしい。そして日の暮方、私をむかへに來た。一部の人は、もう山へ行つて、場所を用意してゐるといふ。出かけてみると、月は十二日ごろらしく、もう高くのぼつて居たが、雲の多いために道は暗い。町の家並をはなれると、つま先あがりの道は石ころだらけで足元が甚だわるい。そんなところに、一二軒づゝ家がある。Mがその一軒をゆびさして――「此の家ですよ、以前に、寶りに出てゐたものですから、先生の疎開の家に好かろうと思つて、内交渉をしたことがあつたのですが……」と云ふのだ。いかにも、戦争中の談だ。鹽尻の松雨亭にたのむ前に、松本のYから、松本へ來てはどうか、寶家がたくさん出てゐるからといふ談があつたのだ。その談は、私が其家を見に來るまでにも進捗せずして、終つたのだつたが――

「今日にしてみるとヤスイものでしたね」とMは惜

萩の花はやいはつぼんのほとけが來る日で　江良碧梧

雲にほうづきのような日の出てけふもひでり　原農平

遠くでかみなり東西南北あけてあるゆうだちの、すすめ葉にをりそれからほんぶり　天沼棄人

日が落ちて空があんずいろの菜園に出て若い奥さん子ども樂しそうに話しどの木にも蟬鳴いてゐる　柳田流矢

焼あとたつた一本の銀杏で稻妻するちよつと汁の實をみようが畑に出た赤い鼻緒の雨　三好草一

復員のおまえの話も實が入つた皿の枝豆けさも木槿早くからさいてゐる深呼吸　船木月々虹

日がさせばとんぼの影さしてゐるひらかなで橋の名蓮の花よろし

國寳の鐘日がぽつかりと冬木の中

雪ふれば甘くなる柿雪すこしふる

少女海から歸つてよりしづかな日の暮れの木の枝

たいさう降つてきて一日涼しくて風呂の湯かげん

月があつて山と山の間を私が浴衣きて歸つてくるもの思わぬゆたかさ顔にむしタオルのせてもらつてゐる

松の木その奥ふかく住む人のうわさしてゐる

戸をあけた家の隣がまた戸をあけて行く、秋

干せてひくくなつてゐる日の麥

秋の果物屋少女が買つてりんご少女が賣つてゐる

夕ぐれつゆあけの空青く鬱蛾燈のともり

光つて樹に月がすずしすぎる晩

かがやいてゐるは月の圓いおもて

しそうに云ふのだ。ズイブン不便な處ではあるけれども、月見の家にはたしかに好い。その家には、二階に明るい電氣がついてゐた。それから、まだ〳〵大分に坂道をあるいて、丘の中腹に出た。それが城山だつた。Yは草原の上にホタルのやうに、懐中電燈をぴか〳〵させて待つてゐてくれた。Sはどこが好かろうかと、草の平らな、月を見るのに、木の枝のジャマのないやうなところを物色して、ゴザをひろげてゐた。にわかの思付きで、大いそぎで馳けまわつて、やつと是だけ手に入れたのです」と云ふ。いろ〳〵と物があるらしい。一體、「馳走」といふことは「馳」け「走る」といふことで、主人が客の爲に馳けて歩いて、さま〴〵の用意をするといふのが、此のことばの源だから、此の日のやうなのが、ほんとうの「馳走」なのである。見ると、コンロに炭と、アルコールランプも持つてきてゐる。炭にもアルコールをかけて火をおこす。月が暗いので、ガンドウにろうそくを立てる。一升びんらしい物も、暗い中にゲンゼンとしてひかえてゐるらしい。もう火加減は好かろうと云つて、何か新聞紙に包んである小さな細長い物を取り出してコンロにのせる。一方、アルコールランプの上でもヤカンがあたためつてきたといふ。草の上の月見もなか〳〵面白い。こうなると月はどうでもいゝやうな氣持になつたところへ、雲から明るい顔がポツカリとあらわれて、「ど